



TITLE:

描画法の現代的意義に関する心理臨床学的研究 ―否定の作用と主体の生成に着目して―(Digest_要約)

AUTHOR(S):

松井, 華子

CITATION:

松井, 華子. 描画法の現代的意義に関する心理臨床学的研究 ―否定の作用と主体の生成に着目して―. 京都大学, 2013, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2013-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k17765>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

描画法の現代的意義に関する心理臨床学的研究
ー否定の作用と主体の生成に着目してー

松井 華子

【要 旨】

本論文は、臨床場面において用いられることの多い描画法について、その現代的な意義を検討することを目的としたものである。

そのための導入として、序章では、描画法の現在置かれている位置について確認する。描画法は、心理査定の一分野としても心理療法の中の一技法としても捉えられ、用いられている。この両者は、しばしば相容れないものとして言及され、議論を呼んできたものである。またそれとは別に描画法は、投影法としても分類されている。投影法は何かを“投影”している、と捉える視点については、疑いようのないものとして現在まで経過している。しかし、描画法は何かを“投影”されるものだということは、果たして現代の臨床現場で起こっていることに即したことであろうか。ここにおいて、本論文の大きなテーマとなる描画法と投影法に対する疑義を提示する。

第1章では、現代の心理臨床における変化について、先行研究において指摘されていることを概観する。そして、現代の心理臨床およびクライアントのあり方の特徴として、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という視点を取り出す。「サイコロジカル・マインド」は、これまでの心理療法にとって暗黙の内に必要条件とされてきた人格や「器」、「内面性」などのまとまりを持った統一体としての主体ということがその前提とされているものである。

また、これまでの心理療法で多く言及されてきたイメージ体験についても、その変化について検討する。現代の心理臨床場面では、イメージ体験が持ちにくいクライアントが多く来談することが報告されているが、イメージ体験もまた、「内面性」や「サイコロジカル・マインド」と関わるものであり、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という事態にあっては、イメージを媒介とする心理療法やそこで用いられる技法については、その意義について問いなおす必要がある。

さらに、先に挙げた投影法についても、これまでに論じられてきたことをあらためて振り返る。投影法は、内界にあるものが外界に投影されるものとしてこれまで捉えられてきた。そこでは、内界と外界が分かたれて主体が成立していることが前提とされている。それでは、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”“主体のなさ”が特徴とされる現代のクライアントに対しては、投影法、なかでも描画法を行うことに意味はあるのか、あるとしたらどのようなことだと考えられるか、という問いを、あらためてここで確認する。

また、描画法から3技法（バウムテスト・スクイグル・風景構成法）を取り上げて、“主体”ということと関わってどのように先行研究では捉えられてきたのかを概観する。

第2章では、筆者が行った調査研究を取り上げて、描画法の中でも風景構成法について、“主体”との関連でどのようなものとして捉えられるかを提示する。調査は、主体の生成の問題に関わる神経症の典型例である対人恐怖的な心性と風景構成法表現との関連を検討

することを目的として行われた。その結果、風景構成法表現のいくつかの指標において対人恐怖的な心性との関わりが見出された。これらの指標の表すものの意味と対人恐怖的な心性との関連から、風景構成法は近代的な自己意識を表現する場として機能しうることが示唆された。

第3章においては、風景構成法が第2章で議論したものとは別の機能を持ちうることを論じる。そのための素材として、事例をひとつ提示する。事例のクライアントは、受けている診断や面接での様子から、“主体のなさ”が特徴であると考えられた。そのようなクライアントとの面接の中で、風景構成法が描かれた。風景構成法が描かれ、その後スクイグルも行い、面接終了時にはこのクライアントはひとつの主体として立ち上がったことが考えられた。

ここで描かれた風景構成法作品では、アイテムが描かれたり描かれなかったりという選択が行われたことが重要であると考えられる。そこに、「否定」する主体が生まれているからである。このことを、主体の生成のために必要だとされる「融合」の状態における「否定」の行為との関連から検討し、主体の生成の場としての風景構成法の機能を取り出した。

第4章では、第3章と同一の事例で登場したスクイグル（交互スクイグル）について取り上げる。スクイグルでは、クライアントはそれを行うことには同意し場において「融合」しながら、ルールのとおりには決して描かないという「否定」の行為が見られた。その結果、自己像に重なるとみられるタヌキの絵がクライアントによって描かれた。ここにクライアントの主体の成立を見ることができると考えた。またこれは、“主体のなさ”“サイコロジカル・マインド”の欠如”が特徴とされるクライアントに対して、その有効性が論じられている“「双子」としてのセラピストがクライアントを「蹴り出す」こと”が起こっているとも考えられた。これには、お互いの役割を交代しながらプロセスが進んでいくというスクイグルの対称性と非対称性の性質も関わっているものと考えられた。したがって、スクイグルはその本質として「融合」と「否定」の関わる主体の生成の場という機能を含んでいるものと考えられる。

第5章では、イメージ体験と描画法との関わりについて検討した。主体の生成とイメージの誕生とは同時になされるものであるということをもとに提示し、第4章で取り上げたタヌキの絵についてそのイメージ内容の面から検討を加えた。タヌキに付与されているイメージの歴史的な変遷を辿り、タヌキには山と里、聖と俗などの対立するものの境界においてその両者を行き来する存在としてのイメージが与えられてきたことが見出された。また、面接のプロセスで見られたクライアントの様子と重ねてみても、このタヌキイメージはクライアントのあり方の特徴と類似するところが多くあった。このことから、スクイグルにおける主体の生成とイメージの誕生の同時性が確かめられた。

第6章では、バウムテストが取り上げられた。筆者がテスターとして関与した事例について、議論した。この事例で描かれたバウムテストは、3本の線のみから成り立つものであった。第一筆の線が描かれるまでは、テストティーはただブツブツとつぶやき続けていた。筆者は描画を描いてもらうのは無理だと判断して去ろうとし、そのための言葉を掛けるために、テストティーの言葉に耳を傾け、その世界に入っていた。すると、テストティーは鉛筆を取り、線を引いたのである。線は3本に増え、テスターはそれを「秋の柿の木」として想像した。その直後、テストティーから、それが「秋の柿の木」であることが告げられた。

この出来事から、「混沌」「融合」に入ること、その「融合」を「否定」すること、その「否定」の描線を挟んでテスター・テストティー両者の「出会い」が生じること、などを検討した。また、描かれた描線においてイメージが誕生することについてもあらためて検討し、それを「見立て」の見地から論じた。そして、バウムテストにおいては、閉じられたものとしての主体の生成が出現しうることを述べた。

第7章では、これまでに検討したことの総括として、「融合」と「否定」の作用の見地から、描画法をあらたに3様相に分類した。一つは、“線が引かれること”であり、バウムテストやスクイグルの描線において、もっとも原初的な「否定」の作用が見られ、そこに主体の根源的な立ち上がりの可能性を見いだせることを述べた。そして、“線が引かれること”と同様に“線が引けないこと”も、「否定」の一表現として、主体の生成においては重要であることを論じた。次に、“線が閉じられること”として、特にバウムテストに焦点を当てて検討した。バウムテストは、ただ線が引かれるのみならず、そこに幅が生まれ二次元の面としての「内面」が生まれるところが特徴的である。それは、心理学的な意味での「内面性」と等価のものであると考えられ、すなわちそこに、「サイコロジカル・マインド」を持つものとしての主体が生じる契機が含まれていると考えられた。三つ目として、“線と線が関係付けられること”とし、風景構成法に表現される自己意識について検討した。風景構成法は、一つ一つは閉じられたアイテム同士が関係付けられながら描かれていくところが独特である。これは、アイテムとしては一つ一つ閉じられて「内面性」を持ちながら、次に描かれるアイテムとの関係としては「外側」のものとして位置づけられる、という意味で「内面」と「外側」との緊張関係をはらみながら描かれていくものである。これは、近代的な自己意識が生成されていく動きと重ねて考えることができるようなものである。

終章として、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という事態において、描画法は投影法と呼べるのかということを論じた。「融合」と「否定」の行為を行える場として描画は機能し、それが、主体の生成の契機となり、そこから「サイコロジカル・マインド」が生まれる可能性がある。そこにこそ、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という事態において、描画法を用いる意味がある。このように、主体の生成と「サイコロジカル・マインド」の発生を待つ場としての描画法があり、そこに表現されるものは現在の主体の主体のあり方そのものである。したがって、“内界にあるものの一部が外界に投影される”という意味での投影法とは呼び得ないことをここでは論じた。

また、補遺として身体を用いた＜作業＞としての描画法の意義についても論じた。これは、身体を用いて絵を描くプロセスの中で、物理的な抵抗や違和感を覚え、それが内と外との違和感や差異として心理学的にも自他を分かちものとして主体の生成を促進する可能性があるという考えである。

最後に、このように心理療法やそこで用いられる技法や概念は常に更新され、検討し直される必要があることを述べて、論を閉じた。